

アメリカ社会科学における G. ジンメルの初期受容
——ジンメルの著作に対する同時代のアメリカにおける書評を中心に——
田村豪（神戸大学人文学研究科博士課程前期）

本報告では、ドイツの社会学者・哲学者・美学者として知られる G. ジンメル（1858-1918）が、彼の存命中にアメリカにおいていかに受容されたかについて、彼の著作に対する書評を用いて検討する。これまでアメリカでのジンメルの受容は、特にシカゴ学派社会学への影響という観点から論じられてきた。ジンメルのアメリカへの紹介は、彼のアカデミックな経歴のなかでも初期の 1890 年代から行われ、1896 年以降、『アメリカ社会学雑誌』に A. スモールによる英訳論文が掲載されていた。この背景には、それ以前のアメリカにおける、スペンサー主義と結びついた社会ダーウィニズムの流行による格差問題、人種問題の正当化、黙認があり、それゆえ社会問題、社会改革と結びついた新たな学問が要請され、それが結果的に社会学として成立していくことになった。科学としての社会学への要請が高まるなかで、ジンメル自身も社会学を一つの科学として成立させようとしており、ジンメルの問題関心とアメリカの学者との問題関心は重なっていた。こうしてジンメル自ら形式社会学を提唱したことから、社会学者として扱われるのが主流となり、ここからジンメルが過度な形式主義者として批判される原因を生み出すことになるといえる。

しかし、ジンメルは必ずしも社会学者としてのみ扱われたのではない。シカゴ学派をはじめとするアメリカ社会学へのジンメルの受容と並行して、英語圏においては『道徳科学序説』（1892/3）や『貨幣の哲学』（1900）、『カント』（1904）、『ショーペンハウアーとニーチェ』（1907）、『文化の哲学』（1911）などの真正面から社会学を扱ったものとは言えない著作に対する書評が書かれている。例えば G.H. ミードは『貨幣の哲学』への書評を記している。これらの書評からは、当時のアメリカにおけるジンメルの社会学者像とは別のジンメル像が浮かび上がるだろう。というのもこれらの著作そのものは、時代診断という側面を含み、特に倫理の問題はジンメルが強く意識していたと考えられるからだ。例えば、ジンメルは『道徳科学序説』の目論見を、それまでの倫理学を批判しながら、近代の社会科学において倫理学を取り扱うこととし、『貨幣の哲学』や『文化の哲学』では現代においては貨幣をはじめとする客観的文化が個々人の主観的な発展、展開と齟齬をきたすとされる。

このようなジンメルの著作に対する書評を扱うことで、当時の時代状況に対するジンメルの評価が、アメリカにおいていかに評価されたのかの一端が明らかになるだろう。これを明らかにすることができれば、ジンメルのアメリカ受容をより広い文脈から再検討するひとつのきっかけとなるだろう。